# 「結核集団発生の対策に関する自由集会」に参加して

甲府市役所福祉保健部
保健衛生室医務感染症課　長田 麻衣子

2022年10月7日から9日まで，第81回日本公衆衛生学会が山梨県甲府市で開催され，結核の集団発生に関する自由集会が初日に行われました。10月上旬としては，68年ぶりとなる記録的な寒さでした。参加者は会場40名とオンライン189名計229名で，2事例の報告と会場やチャットでの意見交換会が行われました。

まず，加藤誠也結核研究所所長より，結核の罹患率は減少しているが，受診控えがあり診断の遅れが懸念されることや，感染の起こり得る機会は減少していない状況，自由集会は集団発生での技術的な経験を共有できる貴重な機会の場であるなどの，話題提供がありました。

続いて「探知に時間を要した高齢者施設の結核集団感染事例」と題して東京都西多摩保健所の村上邦仁子氏より報告がありました。

特別養護老人ホームの施設職員が職場健診の胸部X線検査において要精密検査となり，痰や咳症状があるものの，結核の診断に至らず経過観察後，再び咳症状にて受診し肺結核と診断された事案の紹介がありました。接触者健診の結果，職場の健診対象の拡大は行いませんでしたが，約1年後接触者健診対象外だった入所者が複数発病したという報告でした。高齢者施設で短期間に発生した場合には，リスク要因を考慮し詳細な感染源探索と接触者健診の拡大判断を再考することや，要精密検査者においては，結核の可能性を念頭に置くことが示唆されました。また，資料では集団発生調査の際に行うべき症例一覧表の作成，記述・分析疫学を基に関係者間で共有する経過などが参考になりました。日本の結核患者の年齢別割合では，高齢者は高い状況にあり，ハイリスク層に該当します。本事例からは，個人の健康だけでなく早期発見による蔓延防止の観点からも健康診断の受診確認や精密検査時の勧奨の強化を行うことが大切であること，本人の聞き取りはもちろん施設内からも正確な情報を聞くこと，施設向けの啓発が必要であることなどを再認識しました。

次に「区内中学校における結核集団事例への対応」として板橋区保健所の高橋あずさ氏より報告がありました。学校からの相談で患者を探知した事案であり，学校所在地と居住地保健所が異なり学校関係者も含め連携が多岐にわたる中で患者発生から保護者への説明，接触者健診の対応，役割分担の工夫についての報告でした。ネット時代だからこそのSNSの使い方として，誤った知識から周囲へ与える影響の大きさや，良からぬ形で情報が波及してしまう課題，学校と7か所の保健所の連携について，同じ保健師として興味深く聞くことができました。本事例からは，届出受理と接触者健診を実施する保健所が同一でない場合には，第一報を迅速に入れること，健康教育の実施や経過説明など丁寧に行い，不安軽減に努めること，患者発生時だけでなく平常時より学校や教育委員会と連携しやすい顔の見える関係づくりが必要であることを改めて感じました。

各報告を受けての質疑応答では，接触者健診の対象者の範囲決定の判断が難しい事例もある中で，対象者把握時の交友関係の視点が意識出来ていないことに気づくことができました。また，菌株分析では，分子疫学の科学的な結果を用いることで，感染経路の証明や状況の解明など個の情報が集団への貴重な情報になり，疫学調査の向上につながることを再確認しました。自由集会に参加することで，集団発生の事例など日頃の自分自身の対応を振り返る機会ともなり有意義な時間を過ごすことができました。